

# Lighting in the Space

[明かりのある情景]

vol.20

“ 16 (2006) ”

designed by >>> Omer Arbel



ウォーターフロントとノースショアの山並みが楽しめるロケーションにあるフェアモント・パシフィックホテルのエントランス前広場には、合計480枚の葉を付けた高さ4~6mの樹々が並び、地表には敷石と同じ大きさにカットされたシダー製ブロックや厚板が敷き詰められた。バンクーバーの自由な気風を感じさせてくれるデザインだ (撮影 / Gwenael Lewis)

## 有機的に伸びる枝から灯る“葉”

建物のファサードやエントランスへのアプローチといった屋外空間のデザインが、人々の心理面に与える影響は大きい。そこを訪れる者にとって、これから始まる時間の序章であり、建物の内部への期待感を一層高めてくれる。しかしながら、このような屋外空間で使用できる照明器具は、厳しい環境下で使用されることから、堅牢性や合理性を売り物にした製品ばかりが市場に溢れ、デザインの多様性が乏しく物足りなさを感じることも多い。

しかし「16」ならば、個性的な屋外空間をつくってくれるだろう。「16」は2005年にカナダ・バンクーバーで設立された照明ブランド、ボッチ (Bocci) の製品で、同社の特徴である高度なガラス加工技術を用いて製作された照明器具だ。長さ約20cmの“葉”は、白、グレー、透明のガラスを水平方向に重ねて構成されているが、ガラスが固まる前の段階で次の色を連続して注ぐ製法により、個体差があるあいまいな境界線が織り成される。点灯した光を内包する様子はぼっと花が咲いたようで、秘められた生命力を感じさせるデザインに仕上がっている。

葉を支える枝々はモジュール方式を採用しさまざまな組み合わせが可能だ。その連結部にはステンレス製アーマチュア (ボールジョイント) が使用されていて、接続すると低電圧での給電も可能になっていることに驚かされる。これにより、配線を気にせずに連結方法や葉の向き、サイズの変更が設置現場において容易に行える。製品のフレキシビリティは、デザインの自由度を高めてくれるものであり、空間と共鳴する照明をデザインするための要素になっているのだ。

ボッチのクリエイティブディレクターで、同社の創設者でもあるオマー・アーベル (Omer Arbel)。ボッチをスタートして間もない頃に会った彼は、控えめながらもぶれない強い意志を感じさせる人物だった。当時発表されたミニマルな球体のランプ「14」は、照明の分野ではまだ一般的ではなかったりサイクルガラスを素材に用い、製品専用のLED電球を自らリリースするなど、サステナブルな指針が貫かれていたことも印象深い。番号が付けられる彼のコレクションは、その後も着実に点数が増え、今年の新作では「87」を数えるようになったが、いずれも独自性が高いデザインであり、単体で完結するというよりも空間との関係の中でより美しい輝きを増すものだろう。

そこを訪れる人々の気持ちをポジティブに変化させる照明のデザイン。屋内空間においては元より、屋外空間においてもバリエーションを豊かにする、新しい照明デザインの展開を切望して止まない。



16 (2006) 8~72灯までの展開があるペンダントタイプと、パーチ、ポプラ、樺、山雀子、イトスギ、オリウグと名付けられたツリータイプ (スタンド式) がある (提供 / Studio Noi)